

奇跡の成長期を迎えた台湾映画

映画評論家 暉峻 創三

アジア映画ファンの中で「聖地詣で」と呼ばれる儀式がある。香港映画ファンが香港まで映画を見に行く、韓国映画ファンが韓国まで映画を見に行く、インド映画ファンがインドまで映画を見に行く、といった行為のことだ。時には現地映画の有名ロケ地まで足を延ばすことも含まれる。けれど、こと台湾映画ファンに関する限り、長年にわたってこの儀式は香港や韓国やインド映画のファンに較べて活発ではなかった。せいぜいが侯孝賢映画のロケ地を訪ねるなど観光地巡りに多分に近い旅行が知られてきた程度。その理由は、察するに難しいことではない。最新の台湾映画を見たいと思って台湾までやってきても、そこでは台湾映画なんて一本もやっていない、もしくは運が良くても見れたのは滞在中一本だけ、なんてことが日常茶飯事だったからだ。現地に出かければ浴びるように地元産映画を見ることができた他のアジア圏と、それは好対照をなしていた。

なぜこのような状況に直面せざるを得なかったのか。それも理由は明快だ。台湾人が台湾映画を見たいと思っていなかったからだ。仮に映画ファンではあっても、見たいのは国産映画ではなく圧倒的にハリウッド映画。侯孝賢（『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』）、エドワード・ヤン（『ヤンヤン 夏の思い出』）、蔡明亮（『ヴィザージュ』）、アン・リー（『ラスト、コーション』）らの華々しい国際的成功、名声で世界に数多の熱狂的なファンを持ってきた台湾映画だが、それと台湾内の台湾映画に対する空気とは、天と地ほどにも開きがあった。劇場はハリウッド映画に優先的にスクリーンをあてがう傍ら、ただでさえ本数の少ない台湾映画は、公開されて間もなく劇場から姿を消すことがほとんどだった。そのことは、台湾における台湾映画の市場シェアが明晰に物語っ

ている。ほんの数年前まで、台湾の年間劇場興行収入の中で地元産映画が生み出す収入の比率は、常にわずか0%台から2%台というのが標準。日本や韓国では自国映画収入シェアが50%前後で推移していることと較べて、雲泥の差がそこに存在していた。

けれど一昨年、そして昨年と、突如台湾映画をめぐるこの伝統的光景は決定的に一変し始めた。いつフラリと台湾を訪れても、まず例外なく台湾映画はロードショーされている。それもしばしば、一本ならず二本、三本とだ。そして台湾映画を上映する劇場内は、かつての閑古鳥に代わって若者の熱気と歓声で埋め尽くされるようになってきた。

台湾映画の市場シェア数値に再び目を向けてみよう。09年のそれは2.14%だった。それが10年に一躍7.1%になったのを経て、昨年は17.5%と恐ろしいまでの伸びを実際に見せているのだ。興行収入そのものの伸びも著しい。10年前の01年には、台湾映画の年間総興行収入は、台北地区で370万元。それが10年には2億2560万元になり、11年にはなんと01年比で200倍規模に迫る7億1500万元もの収入を稼ぎ出すに至った。

これほどまでに驚異の伸長を見せたのは、台湾映画総体の人気が少しずつ底上げされてきた果てに、昨年、とてつもない大ヒット作が連続的に登場したためだ。台湾映画人気底上げの決定的なきっかけとなったのが、08年作品『海角七号 君想う、国境の南』だったのは間違いない。大スターも、その時点での監督の名声もないまま公開されたこの作品は、封切り直後こそ静かな出足だったものの、週を追うごとに評判が評判を呼び、ついには記録に残っている限り台湾映画の歴史上最高の興行収入をあげた作品に。さらに勢いは止まら

ず、香港映画なども含む全中国語映画の興行史上でも最高興収をあげ、ハリウッド映画など台湾で公開された全ての作品を対象にしても、これより上には『タイタニック』のみという怪物的記録を樹立して、その長期に及ぶ公開を終えた。

そしてその『海角七号』を生み出した監督・魏徳聖による待望の新作『セデック・バレ』が鳴り物入りで登場した年こそが2011年だった。日本統治下台湾での先住民セデック族による抗日暴動・霧社事件を『セデック・バレ 太陽旗』『セデック・バレ 虹の橋』と二部に分け4時間を超すスケールで描き出した本作も、前編が1億9800万元、後編が1億3500万元とミラクル・ヒットを記録。これが昨年の台湾映画の総興行収入を大きく押し上げたのは間違いないが、しかし両者を合わせてもその数字は昨年の総興行収入の半分にも満たないところに、現在の台湾映画の底力を感じさせる。実際、去年はあらかじめ大ヒットが待望されていた本作以外にも立て続けに想定外のスーパーヒット作が登場したのが、台湾映画シェアをここまで高めるもう一つの要因となった。その一本は、お正月映画として登場した葉天倫監督の『鶏排英雄』、もう一本は夏休みに登場した人気小説家・九把刀の劇場長編監督デビュー作『あの頃、君を追いかけた』である。なかでも後者は『セデック・バレ』前後編の平均興行収入を上回る1億8000万元という凄い記録を樹立した。

これら3作品（『セデック・バレ』2部作を2作と数えれば4作品）が歴史的なヒットを遂げた今日の台湾映画界は、単に好況だというだけでなく、他に類を見ない特色ある映画界を形成しつつあることも見ておくべきだろう。たとえば日本では、大ヒット作がどういうところから生み出されてくるか？ それは東宝、東映、松竹など老舗のメジャー映画会社か地上波テレビ局、そしてスタジオ・ジブリなど、大ヒット作を生み出して当然の実績と名声を誇る会社から生み出されてくるもの

だ。そしてそこにはヒットメーカーとして名を馳せる監督と、国民の人気を誇る大スターが名を連ねている。こうしたヒット作成立のための基盤は、日本だけでなく韓国、香港、中国、インド、そしてハリウッドに至るまで世界的な共通事項であると言ってもいいだろう。だがこの世界的に共通な業界常識が、台湾でだけはどうやら通じない。

魏徳聖が『海角七号』で前人未踏の大成功を収めた時、彼はそれまで個人的に商業公開を目的としない自主製作映画を作ったことがあるだけの新人監督だった。そしてそこに主演した范逸臣と田中千絵も、それまでまったく売れっ子とは縁遠い存在だった。作品を製作したのも、かつてヒット作など作ったことのない監督の個人プロダクションである。こうした環境は、『セデック・バレ』にもそのまま引き継がれている（監督にヒットメーカーという名声が付いたことだけは別にして）。やはり製作主体は監督の個人プロダクション。今回は老舗映画会社・中央電影公司も製作の一社に名を連ねてはいるが、それはあくまでも後から補助的に加入したにすぎない。しかも中央電影公司そのものも、長い歴史を誇るとはいえ近年は事実上の休眠状態にあった会社だ。そして今作でも主演者として作品を引っ張るのは、先住民の血をひく非スターたち。ビビアン・スー（彼女も部分的に先住民の血を引いているという）らよく知られたスターも出てはいるが、いずれも脇役級に過ぎない。そんな出自の作品が、しかしまたしても台湾映画の歴史を画する大ヒットを遂げてみせたのだ。

事情は『鶏排英雄』にしても同じ。監督の葉天倫、主演の藍正龍、猪哥亮らはいずれもまったく目新しい名前というわけではなかったものの、彼らに歴史的な大ヒット作が作れるとは、いやそこそこのヒット作が作れるとさえおそらく誰からも信じられていなかった映画人である。屋台街を舞台にしたご近所騒動ものという作品のジャンル

も、いかにも大ヒットとは無縁そうな題材だった。『あの頃、君を追いかけた』も同様だろう。監督の九把刀は小説家としてこそ売れっ子の立場にいたが、映画監督としての実力は未知数。以前にオムニバス映画の一篇を監督したことがあったものの、それは必ずしも成功したとは言えない結果に終わっていた。そしてここで主演を務めた柯震東とミシェル・チェンも、今でこそ本作のヒットで飛ぶ鳥を落とす勢いの人気スターの座に駆け上がったとはいえ、この映画が公開されるまではまったく観客動員力など期待されていなかった若手俳優だ。さらに本作の場合、作品を製作したのも映画界には新参者ということになるアンジー・チャイ（数々の華流テレビドラマのヒット・プロデューサーとしては知られていた）とソニー・ミュージックという異色の取り合わせだった。

映画業界で実績、名声のなかった人たちが寄ってたかって超級ヒット作を作り上げる。それもアクション、ホラーなど既成の安全な人気ジャンルに寄りかかることなく、自身のオリジナルなアイデアで作品を作り上げて大ヒットさせる。これが世界でも稀な、台湾映画界にだけ顕著に見られる特徴だ。だが今、韓国や香港の映画界がその逆の方程式、すなわち既成の大スターへの飽くことなき依拠と、既成のヒット・ジャンルへの飽くことなき依拠を繰り返した結果、重症の行き詰まり感に直面しているのを見ると、この台湾独自の映画製作法こそが現在の映画界を活性化させるカギであるようにも見えてくる。

このことと併せてもう一つ、最近の台湾映画には顕著な特色があることにも触れておくべきだろう。それは徹底してローカルな映画作りへの意思だ。

中国語圏映画界では、中国本土に針路をとるのが、先進的なマーケティングの既定路線とされてきた。特に香港映画界は大部分の作品が中国との合作で映画を製作したり、香港の会社そのものが

中国に支社を設けるなどして、中国シフトを強めてきた。そしてジョン・ウーから徐克、ピーター・チャンらに至るまで香港映画界で地位を確立した監督たち自身も挙って中国へと北上をしていった。製作の形態のみならず作品のテイストも中国シフトを強めている。『レッド・クリフ』『新少林寺』に代表されるような、時代劇アクションと大スターの掛け合わせ。これが昨今最も確実に収益を生み出せると看做されている路線だろう。実のところ台湾映画界でも、一時、こうした中国マーケット指向の企画がなかったわけではない。

そして、これは中国語圏映画界に限ったことではないが、現代の映画界が世界スケールで突き進んでいるトレンドとして、企画のグローバル化がある。多国籍の映画会社による合作、国外にも知られたスターを使うことによりあらかじめ海外からの収入も計算に入れた製作スタイルなどだ。ネット時代を迎え、急速に国境を跨いだスター、国境を越えたホットな話題が形成されている今日だけに、映画業界の生み出す企画も、今やその多くは当初からグローバルな商品として設計されている。

けれども『海角七号』『セデック・バレ』『鶏排英雄』『あの頃、君を追いかけた』に代表される最近の歴史的な大ヒット台湾映画はどうだろう。そこにこのような中国マーケット指向、そしてグローバル指向は、微塵も感じられない。台詞に台湾語や先住民語が、あるいは仮に標準中国語であっても酷く俗っぽい、お下劣でさえある言葉が好んで使用されているという点は別にしても、どの作品も表面的には、台湾で長年生活し続けてきた観客だけが存分に感情移入できるような内容の作品だ。この極度にローカルな、地に足をしっかりと着けてよそ見はしない映画製作の方法が、おそらくは逆に今日の台湾の観客に大いに新鮮感をもって歓迎されたのだ。

だが、それではこれらの成功作は、ただ国内的

な成功を勝ち得たに過ぎないのか？ ……という
と実はそうではなく、おそらくは製作者たちの意
にさえ反して、国境を越えた成功さえ収めつつあ
ることに、ここ1～2年の台湾映画躍進の真の奇
跡がある。

昨年、香港では歴史的な大事件が発生した。『あ
の頃、君を追いかけた』が香港でも商業公開され、
大ヒット。しかもそれは昨年度の香港映画も含む
中国語作品のなかでナンバーワンのヒットまで遂
げてしまったのだ。いや、その大ヒット街道はそ
れだけで終わりはしなかった。年間のトップとい
う地位を確定したかと思いきやさらに観客動員は
伸び続け、ついには香港で歴史上公開されたあら
ゆる香港映画の興行記録をも上回るミラクル・
ヒット作にまでなってしまったからだ。それまで
香港ではジャッキー・チェンや周星馳らが主演し、
時には監督も兼ねて、数多くのミラクルな大ヒッ
トの記録が作られてきた。『あの頃、君を追いか
けた』という台湾青春映画の小品、それも大スター
抜きの小品は、なんとそうした巨塔たちさえ上回
る興行成績を挙げたのである。

さらにもう一つの望外の好消息が、中国本土か

らもやってきた。『海角七号』『鶏排英雄』『あの頃、
君を追いかけた』といった作品が、続々中国の会
社に商業公開権が買われ、本土でもロードショー
されるに至ったのだ。昨今の香港映画とは違っ
て、これらの作品はいずれも中国公開などまった
く見込んではいなかったろう。公開云々以前に、
そもそも大陸の中国人に理解してもらえとさえ
考えてはいなかったのではなからうか。しかし、
これまたネット時代を背景に、大陸にも即時的に
台湾のニュースが伝わるようになった今、台湾の
超ローカルな作品にとって国境を越えるのに大し
たハンデなどなかったのだ。

侯孝賢など一部の名匠の国際的話題作を別にす
れば、台湾映画がその海外市場を失って久しい。
しかし今、台湾映画は国内での爆発的な好況に加
えて、海外市場というもう一つの巨大な、そして
望外だったマーケットまで手中にしつつある。ほ
んの10年ほど前まで映画製作産業滅亡の危機さ
え本気で囁かれていたのが、台湾だった。それが
いきなりこんな時代を迎えてしまう所に、台湾と
映画の計り知れない奥深さがある。